OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞Karl Popper, Knowledge and the Body-Mind Problem : In Defence of Interaction
Author(s)	池田, 健人
Citation	年報人間科学. 2019, 40, p. 41-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71611
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈書評〉

Karl Popper
Knowledge and the Body-Mind Problem: In Defence of Interaction
London and New York: Routledge (1994)

池田 健人

「ビル、皆は私を気むずかしい男だという。ほんとうに私は気むずかしい男なのだろうか」。バートリーは回想する。ポパーがそう尋ねたとき、バートリーの返事はほとんど考える間もなく決まっていた。「カール、そんなことを聞くのは気むずかしい男だけですよ」[1)]。

バートリーは、LSEでポパーの下に学び、のちにスタンフォード大学において教鞭をとることとなるアメリカ人である。バートリーが、ポパーがいかに気むずかしい男であるかを聞き知ったのは、彼がハーバード大学に在学中のことであった。ポパーは、他の人々に、いつも執拗なまでに自己の誤りの承認を要請した。ポパーが残した数多くの業績のなかでも、反証主義とよばれる、科学における方法論の提唱は特筆に値する。これは、科学活動の現場における一種のルールの提案のようなものである。ポパーは経験科学に属する言明はすべて反証可能でなければならないとした。この反証主義は、のちの科学者および科学哲学者たちに多大な影響を与えた。

ポパーが生涯をかけて取り組むテーマはじつにさまざまであるが、そのすべてに通底する思想のひとつがこの批判精神である。ポパー哲学にあまりなじみのない読者であっても、まずはこのことを押さえておくことができれば、いくぶん以下の内容もわかりやすくなるのではないだろうか。

さて、本稿の構成についてであるが、本稿は本書の行論にならって各章を並べ立てて順に検討していくというようなかたちはとらない。本書はエモリー大学におけるポパーの講義録という性格をもっている。そのため、各章ではいくらか個別的な内容が論じられており、これらを順に検討してしまうと、紙幅の関係上、本稿が全体としてあまりまとまりのないものになってしまいかねない。そこで、本稿では、本書の漠然とした紹介に陥ることを避けるため、その主題である知識の問題と心身問題を中心とした内容の再構成を目標とする。

本書の議論はポパーによる三世界論の考想に大きくかかわる。それは、簡潔にいえば、物理的対象または物理的状態の世界（世界１）、意識の状態、または心的状態、行動性向の世界（世界２）、そして思考の客観的内容の世界（世界３）という少なくとも３つの世界が存在論的に区別されうるとする説である。これら３つの世界は、世界２の仲介によって相互作用することができる。

ところで、「思考の客観的内容の世界」とはどのようなものか。この言葉の意味がわかりにくいと思われるので、ここからは客観的知識の問題を通して「思考の客観的内容の世界」とは何かということについ

て考えていこう。

客観的知識とは「認識主体なき知識（knowledge without a knowing subject）」であり、あらゆる主観によって接続が可能なものである。たとえば、科学的知識はそのひとつの例である。科学的知識は、特定の個人のみがその所有を主張できるような性質のものではなく、あらゆる認識主体に対して開かれている。それは、物理的なものでも精神的なものでもない。したがって、客観的知識は世界３に属する。

この説明を聞いてプラトンのイデア論を想起した読者もいるかもしれない。本来ならば、これは世界３の無時間性にかんする議論で取り扱われるべき問題なのだが、ポパーに対する誤解を減らすためにも、ここで少しだけ触れておこう。結論からいうと、ポパーの考える世界３は時間と歴史のどちらをも有する点でプラトンのイデア界とは明確に区別される。客観的知識は本質的に人間精神の産物である。世界３は、プラトンのイデア界のように神的な要素を含んだものではまったくなく、人間言語によって可能となる批判的討論を通じて成長することができる[2)]。

世界３について考えるうえで、成長という概念は非常に重要なものである。ポパーは、客観的知識の成長の過程を「$P_1 \rightarrow TT \rightarrow EE \rightarrow P_2$」と定式化した。すなわち、これは問題１（Problem 1）、暫定的理論（Tentative Theory）、誤謬排除（Error Elimination）、新たな問題２（Problem 2）のことである。より厳密には、問題１に対しては複数の競合する理論が提示され、批判評価的議論（CED: Critical Evaluative Discussion）を経ることによって、もっとも生き残るにふさわしい理論、逆にいえばまとめて消去されるべき理論がそのなかから選択される。すでに述べたように、ポパーは反証主義者である。それゆえ、ポパーは非正当化主義者であって、その注意はもっぱらある理論によって提起される問題状況と、それへの批判に向けられていた。真理の存在も非存在も永遠に認識しえない私たちにとって、あらゆる理論は仮説である。たとえそこにいかなる問題も見つけることができず、それが限りなく真に近いものであるようにみえたとしても、それでも私たちにできることは絶えずその理論のうちに批判可能な問題を探し求めつづけることのみである。

ここでひとつの疑問が湧く。この研究プロセスに終わりのないことはわかった。そもそも正当化が必要であるとも述べていないので、無限後退の問題もない[3)]。では反対に遡ったとき、私たちが最初に直面する問題とはいったい何なのであろうか。それは、生存である。ポパーは生得的知識（inborn knowledge）を認めた。これは、伝統的に哲学で論じられてきた生得観念（inborn idea）とは一線を画するものである。あらゆる生命体がもって生まれてくる生得的知識は、決してア・プリオリに妥当なものなどではなく、あくまで心理学的ないし発生論的にア・プリオリなものであるにすぎない[4)]。それはどんなに強く明確なものであっても、挫折してしまうかもしれない（Popper 1963: 47）。生まれたばかりの鳥の雛は、目の前を横切るネコを母親だと思い込み、近づいてしまったがゆえに、そのまま一生を終えてしまうかもしれない。そのような意味で、ポパーはこの生得的知識を「期待（expectation）」と呼ぶ。

このようにして、いまやポパーの理論はダーウィンの進化論と相接することとなる。ただし、ポパーが形而上学的研究プログラムとして採用するところのダーウィン主義は、厳密には「新ダーウィン主義（neo-Darwinism）」とか「現代的綜合（The Modern Synthesis）」などと呼ばれるべきものであった（Popper 1992: 169-70）。たとえば、従来のダーウィン主義における「進化論的進歩（evolutionary ascent）」の概念は、

ポパーにとって受け入れがたいもののひとつであった。この概念は、いわゆる進化の系統樹というものによって表現される。すなわち、進化とはつねに低次の有機体から高次の有機体が創発する過程であり、あらゆる有機体は高次の形態であればあるほど、より幅広い環境に適合できる傾向を示す、というものである。ところが、ポパーにとって、進歩が保証されているものなどは決してどこにもない。すべての生命にできることは、終わりのない問題解決にただ携わりつづけることのみである。したがって、ポパーの考えるダーウィン主義において、進化は必ずしも進歩を意味するものではない。そこには、ただ多様性の増加傾向があるのみである。進化とはある問題に対するひとつの暫定的解決にすぎず、その真偽はテストされるまでは―もっとも、真理性については、たとえある仮説が批判的な反証の試みに耐えうるものであったとしても、それはたんにその仮説が確証（corroboration）を得て真理らしさを増加させるというだけのことであって、それによって真であることが検証されたり立証されたりするなどということはないのだけれども―依然として不明のままなのである。

ポパーのダーウィン主義は、生物体にのみばかりではなく、理論にもまた適用することができる。客観的知識は、私たちと世界３とのあいだの相互作用を通して、ダーウィン主義的な方法で成長する。ポパーによると、心身問題解決のために、精神と直接に相互作用をするような世界３の措定は不可欠なものである。最後に、心身相互作用についてのポパーの見解の要点を確認して、本稿を終えることとしたい。

意識にはさまざまな程度が存在する。ポパーによると、その中でも最高の形態である十全な意識は、人間によってのみ獲得されうる。なぜなら、十全な意識とは世界３に固定されており、それゆえ人間言語や理論の世界に密接に結びつけられているものだからである[5)]。

人間とそのほかの生物はじつに多くの性質を共有しつつこの世界で生活を送っている。たとえば、私たちを含めあらゆる動物はみな、未来志向的な目的や関心などから成る期待をもって生きている。人間と動物のあいだの差異が明確になるのは、時空間についての直観的な理解の水準においてである。人間のもつ時空の感覚には歴史が含まれている。これは、反応動作を部分的な神経支配に頼るようなテンプレート効果によって周囲の事物の運動―時空間における自己の位置―を予測する動物には備わっていないものである。ポパーによると、期待や時空感覚などはすべて傾向性のかたちをとって私たちに内在している。そして人間のもつ傾向性は、歴史をもつ―過去を私たちの意識へと呼び戻すような性質として存在する―点において動物のもつ傾向性とは異なる。意識の程度を決定するのは、まさにこの傾向性の質である。

歴史とは常に理論的存在者である。過去そのものは、いま私が向かってタイプしているこのPCのように、対象として私たちから独立して現存しているようなものではない。それは、いつも何らかの視点からの記述によってのみ存在しうるものである。したがって、人間の傾向性ないしそれによって導かれる意識は理論的性格をもったものとして考えられることができる。換言すれば、人間の十全な意識とは言語の高次機能―叙述機能と論証機能―に大幅に依存するものである。ポパーにとって、十全な意識とは人間言語の獲得によって初めて達成されるものであった。

ところで、眼目である心身の相互作用はどのようにして説明されるのだろうか。ポパーは、意識と人間言語とのあいだの密接な関係を根拠に、左脳の言語中枢における相互作用を主張した。ポパーは心身問題

を脳心問題として捉え、相互作用が大脳に局在するという考えを受容する。それゆえ、ポパーは相互作用の生じる場所は解剖学的に突き止められうると考えたのである。

しかしながら、意識の分析から言語中枢における心身の相互作用へと至るポパーの議論には、より洗練されなければならない点が多く残されていると評者は考える。たとえば、時空間を客観的構造として捉えて、それに対する直観を重視するような考え方は明らかにカント―ひいてはニュートン―の影響を大きく受けているように思われる。ポパーの議論が、彼らの抱えていた問題の多くをそのまま無批判に引き継いでいる可能性は高い。あるいは歴史や傾向性などの特殊用語についても、より詳細な考察が求められるであろう。そして何といっても、言語中枢における相互作用論は、直接的な議論の量的・質的な乏しさや、現代の脳科学および神経科学などの発展に鑑みると、どうにも怪しい。評者の知る限りでは、この見解を真面目に取り扱っているような研究は、いまのところほとんど存在しない。もしポパーの言語中枢説を成功裡に敷衍することができるならば、それは哲学的に大きな貢献をもたらすと期待されてよいだろう。

ポパーの哲学は、その幅広さがひとつの特徴である。ここで主に扱った知識論や進化論、心身問題のほかにも、社会科学や論理学、確率論、量子力学、非決定論など、じつに多岐にわたる分野においてポパーは研究に取り組んでいる。驚くべきことに、ポパーの研究の多くは各界に導入されても、その専門領域における数々の著名な学者ら―神経生理学者のジョン・エックルスをはじめ、芸術史家のエルンスト・ゴンブリッチや心理学者のドナルド・キャンベル、経済学者のフリードリヒ・ハイエク、生物学者のピーター・メダワー、生化学者のジャック・モノーなど―によって広く支持されている。ポパーの議論には洗練されなければならない点が多く残されているとはいえ、そこには専門家の目からみても評価されうるような洞察が含まれているということもまた事実なのである。ポパーの哲学は、いまやすでに議論の尽きたひとつの古典としてさえ認識されているような印象がある。しかしながら、これまでのポパーに対する不当な見解をいったんすべて取り払って、もう一度、改めて彼の哲学と正面から向き合ってみることは、決して無駄なことではないのではないだろうか。

参照文献

[1] Bartley, W.W., III . 1982. ‘A Popperian Harvest’, in *In Pursuit of Truth: Essays on the Philosophy of Karl Popper on the Occasion of His 80th Birthday*, ed. P. Levinson, pp.249-89, Humanities Press.

[2] Bartley, W.W., III . 1983. ‘Non-Justificationism: Popper versus Wittgenstein’, in *Epistemology and Philosophy of Science*, ed. P. Weingartner, J. Czermak, pp.255-61, Holder-Pichler-tempsky.

[3] Popper, K. 1963. *Conjectures and Refutations: The Growth of Scientific Knowledge*, New York: Basic Books.

[4] Popper, K. 1990. *A World of Propensities*, Thoemmes Antiquarian Books.

[5] Popper, K. 1992. *Unended Quest: An Intellectual Autobiography*, London: Routledge.

[6] Popper, K. 1994. *Knowledge and the Body-Mind Problem: In Defence of Interaction*, ed. M. A. Notturno, Routledge.

[7] Popper, K. & Eccles, J. C. 1977. *The Self and Its Brain*, Springer International.

注

1）Bartley（1982）p.249 の記述を基にした。

2）ついでながら、私たちによる自由の所有と世界３の存在は不可分なものである。ポパーにとって、自由とは、私たちそれぞれが有する個別的な思考枠組みの監獄を、批判を通して破壊していく営みのことである。特定のフレームワークに囚われていながら、それでも議論のなかでその幅を変更していくことが可能であるという意味で人間は動物とは異なり、また自由をもつということができるのである。

3）詳しくは Bartley（1983）を参照。

4）このとき、ポパーは「ア・プリオリ（a priori）」ということで、超越論的観念論で知られるイマヌエル・カントをたしかに念頭においてはいるが、その用法に完全にしたがっているわけではない―彼は、自身を「非正統的カント主義者（unorthodox Kantian）」であるとみなしていた時期もある―という点には注意されたい。ポパーは、「ア・プリオリ」という用語を生物が感覚的経験よりも以前にもっている種類の知識を特徴づけるものとして用いる（Popper 1990; Popper 1992）。

5）世界３は人間精神の産物の世界であるにもかかわらず、私たちの意識―自我ないし自己―は世界３に固定されていて、それゆえ世界３なしには存在することができないというのはどういうことか。このことについて、ポパーは、私たち自身と言語の高次機能、そして世界３はともに不断の相互作用を通じて進化し、創発したと説明している。私たちは自我として生まれ出るのではなく、自我であることを学ばなければならない。３つの世界は世界１から始まり、進化の過程で順に成立してきたものであるが、世界２の十全な発達については、世界３との相互作用を通じてのみ達成されうるのである（Popper & Eccles 1977; Popper 1994）。世界１の中から世界２が創発することと、自我が創発することはまったく別の問題として考えられなければならない。